

海にいとむ若者たち

— 県立水産高校を訪ねる —

(天草郡苓北町富岡)



「オールを立て—、今からボートの訓練



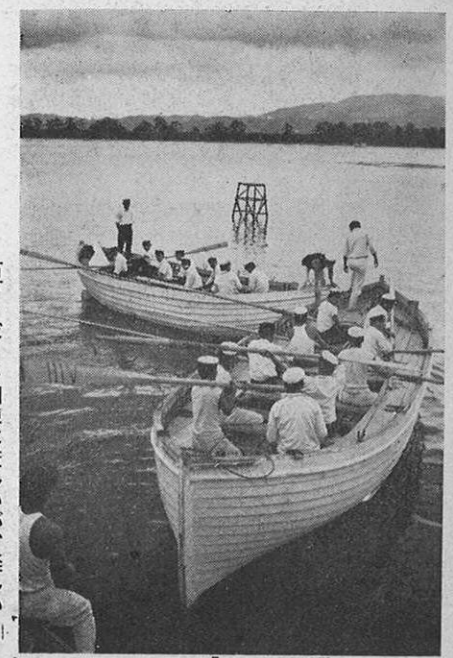
学校の全景、手前に実習用の真珠の棚が見える

青い湾には、その日も訓練中のボートが白い孤を描いていた。真珠の浮棚が点々と列をつくっている。只今、毎夏の実習科目である夏季訓練のたけなわ。手旗信号、ボート、相撲、水泳と火の出るような訓練で生徒たちは逞しく鍛え上げられていく。この学校では漁業科(捕鯨、鮪などの大型漁船、タンカー、商船などの乗務員、魚市場、製氷、冷凍などの技術者、試験研究の職員などになるための技術修得)製造科(缶詰、ハム、ソーセージ、マヨネーズ、燻製品などの食品工業技術者となるための技術修得)増殖科(真珠、カキ、ノリ、マス、ハマチ、熱帯魚などの養殖技術者となるための学習)に大別されている。

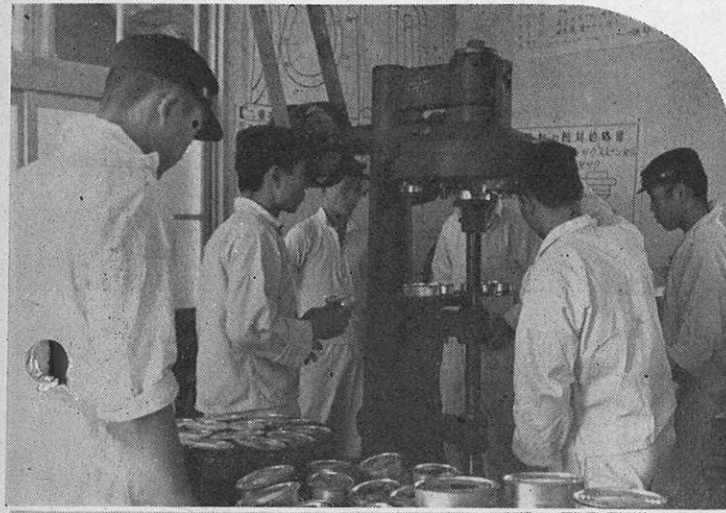
在学中に三航海は必修科目として遠洋航海の乗船実習があり遠く東支那海まで出かける。一航海が一月間、漁業実習のほか調査、海洋観測などの航海技術も



みつちり勉強してくるのである。こゝで三年間みつちり勉強して巣立った学生は、一〇〇%それぞれの会社や研究所へ就職。それもなかなかの好評で明年の求人申込みがもうから殺到している。



右下・ボート訓練は厳しいが、楽しい
右上・練習船「熊本丸」で遠洋航海へ
左下・真珠棚の附着物を除去する
左上・缶詰のつくり方の実習風景



〈あの人この人〉



平垣作なら一年の勝負というところでしょうが、木は二十年、三十年も……口数が少ない。柔和な表情の中に何となく芯の強さを感じさせる人。

現在の山は、興梠さんで三代目。祖父から受け継いだ思想は、自分の山という考えを捨て、みんなの利益になる立派な山を造る。ことだそうで、昭和二十一年に復員して、空虚な気持ちの中からも山をしつかり育てようという決意がしみじみ湧いてきたという。

その頃、戦争中の強制伐採の跡も、人手不足で荒れるにまかせていた。興梠さんは早速植林にとりかゝった。そうしてどいうやらスクスクと伸びかゝつた緑の若杉。だが皮肉にも、あの六・二六の山津波で泥と岩石にすつかり埋没してしまった。こゝで希望は崩れ去ろうとしたが、興梠さんは敢然と廢地に挑戦した。

今年度の造林コンクールで入賞

昭和36年度県造林コンクール杉部門で知事賞をとつた

興梠一房さん

いい杉をつくるコツ……それはまず苗の選定が第一。よく根の発達した苗を選ぶこと、それに手入れ。枝うちや下刈りは年二回(六月から九月)にかけて行わないと杉は垂直に伸びないという。興梠さんの山は家から二キロも離れている。大低は畑作業の余暇をフルに利用するので炎暑の日が多くなる。腰に水筒と鎌、ナタ、食糧をさげて奥さんも一緒に急傾斜の山道を登って行く。下刈は相当な重労働だ。蜂の襲撃に悩まされたり、蛇にかまれたり。だが山は、わが子のような興梠さんは、下刈はできるだけ人手に頼らないようにしているという。

こうして育てあげた興梠さんの杉が全体的な評価を得たことで、白水村の林業界にすばらしい自信と希望を与えていることは見逃せない。

〈阿蘇郡白水村・農業〉

ボクらは山の子

☆☆☆

昭和36年度全日本学校植林コンクールで入賞した

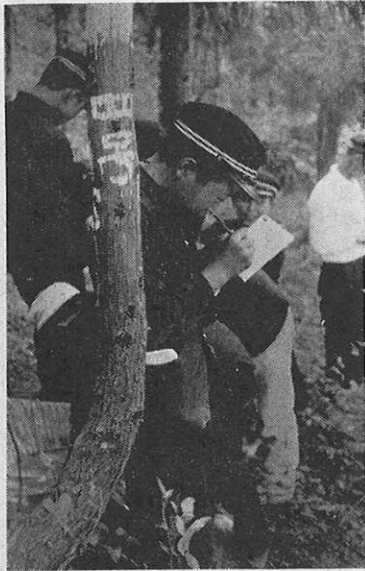
球磨郡湯前中学校



三方を山に囲まれた球磨郡湯前町は、町をあげて植林熱が盛ん。その中心になるのが湯前中学の学校植林。今まで、環境緑化、下刈、愛鳥など各種の全国コンクールでも連続入選している伝統的な愛林学校。

産業教育の一環として植林技術や林業経営に力を入れているが、特に毎年の夏休みを利用しての下刈作業には校長先生を先頭に全校一丸となつて取り組んでいる。来年あたりからこの下刈作業を下刈祭として楽しい行事にしようという意見が強くなつてきた。ところがこの愛林校に一昨年から新しい話題が生まれた。それは、この地方の杉山を荒らしかけていたスギタマバエ駆除の研究だ。県球磨事務所の源島技師が目下熱心に生徒たちの研究を指導しているが、昨年このグループの研究発表を知った町の人々は舌をまいて驚いたという。

〈左・スギタマバエの研究、下・植林風景〉



〈雨の日も風の日も…
スギタマバエ調査班の活動〉

